

追悼



故 宮原 正 先生 略歴
(1923年9月6日生—2006年7月19日没)

<学歴・職歴>

- 昭和22年 東京慈恵会医科大学卒業
- 昭和23年 国立東京第一病院にてインターン修了
- 昭和24年 東京慈恵会医科大学加藤義夫内科学教室副手
- 昭和25年 東京慈恵会医科大学上田英雄内科学教室副手
- 昭和28年 医学博士学位授与
東京慈恵会医科大学上田英雄内科学教室助手
- 昭和32年 東京慈恵会医科大学上田英雄内科学教室講師
- 昭和33年 東京慈恵会医科大学上田 泰内科学教室講師
- 昭和35年 東京慈恵会医科大学上田 泰内科学教室助教授
- 昭和46年 東京慈恵会医科大学内科学教授(定員外)
- 昭和54年 東京慈恵会医科大学第二内科学教授
- 昭和62年 東京慈恵会医科大学附属病院長(～昭和63年)
- 平成元年 東京慈恵会医科大学第二内科学教授退任
東京慈恵会医科大学名誉教授

<学会活動など>

- 昭和34年 日本腎臓学会評議員
- 昭和39年 日本神経学会評議員
- 昭和47年 日本脈管学会評議員
日本内科学会評議員
- 昭和50年 日本脳卒中学会評議員
- 昭和57年 第11回日本ピリン・ピリミジン代謝学会総会会長
日本感染症学会評議員
第12回日本腎臓学会東部部会会長
- 昭和58年 日本腎臓学会理事
- 昭和62年 第30回日本腎臓学会総会会長
- 平成元年 日本内科学会功労会員
日本腎臓学会名誉会員
- 平成2年 日本脈管学会特別会員
- 平成7年 日本神経治療学会功労会員
- 平成11年 日本痛風・核酸代謝学会名誉会員

<表彰・叙勲>

- 昭和61年 腎研究会学術賞受賞(財団法人腎研究会)
- 平成12年 勲三等瑞宝章 受章
- 平成18年 従五位 叙位

宮原 正先生を偲んで

東京慈恵会医科大学名誉教授

酒井 紀

日本腎臓学会名誉会員，東京慈恵会医科大学名誉教授，宮原正先生は，平成 18 年 7 月 19 日，呼吸不全にてご逝去されました(享年 82 歳)。

先生は平成 15 年 10 月頃から左側胸部に違和感が出現，国立がんセンターにて結核性肉芽腫と診断され，翌年から国際医療センター呼吸器外科で治療を受けておられました。その後，東京慈恵会医科大学に転院，一時病状の改善傾向がみられました。しかし，平成 17 年秋頃から膿胸所見が増大。平成 18 年に入り呼吸不全が徐々に増悪し，担当医グループの懸命な努力とご家族の皆様の手厚い看護が続けられました。が，残念ながら幽明境を異にすることになりました。

宮原正先生は，戦時下の昭和 16 年に東京慈恵会医科大学予科に入学，戦争による在学期間の短縮により昭和 22 年 9 月東京慈恵会医科大学を卒業されました。インターン制度の施行により国立東京第一病院での 1 年間のインターン修了後，昭和 24 年 1 月，当時の東京慈恵会医科大学加藤義夫内科学教室に入局，その直後肺浸潤で約 8 カ月療養(60 年後の先生のご病状の病因となりました)。昭和 25 年春加藤義夫教授の定年退任後，東京大学から上田英雄教授が後任として就任され，上田英雄内科学教室と変わりました。当時，上田英雄内科学教室は上田泰先生が助教授を務めておられ，宮原先生は上田(泰)グループに加わり，東京大学におられた大島研三先生一派によって紹介された腎クリアランス法に注目し，大島先生の共同研究者金子好宏先生からその測定法などのご教示を受けられました。その後先生は腎クリアランス法を駆使して，早くから糸球体腎炎や高血圧症を中心に種々の腎疾患の腎機能について研究を始められ，腎静脈カテーテル法による研究も開始して，クリアランス法を中心として腎機能の研究を進められました。さらに，昭和 30 年には新潟大学の木下康民先生によって始められたわが国最初の腎生検法を学ぶために，同大学に研修に行かれ，逸早く Vim Silverman 針による腎生検法を導入し，上田(泰)腎研究グループの二大潮流となる腎機能および腎の形態面からの研究手法を確立されました。先生は，昭和 33 年 7 月からは新しい内科学教室を開設した上田泰教授の講師，次いで助教授として上田内科教室の基礎造りに尽力され，上田先生の最良の女房役として活躍を続けられました。

昭和 40 年頃から先生は，当時注目されていた腎循環に関する研究に重点を置き，イヌを用いた種々の条件下での腎内循環動態を測定し，腎内における神経調節の不均一性に注目され，腎循環の神経性調節を形態的ならびに機能的面から検討されました。その結果，腎血管に対する神経線維分布を明らかにし，領域別では髄質内層部には少なく，傍髄質部，髄質外層部に多いことを報告なさいました。さらに，機能面では，電気刺激によって腎血流量，糸球体濾過値ともに有意に変化し，神経除去腎と神経支配腎では出血による血圧低下で，神経支配腎では腎血流量は急激に減少するのに神経除去腎では緩徐な減少傾向を認めました。これらの研究から，腎神経が皮質，髄質外層の腎血管に多く分布し，腎の自己調節や体液性因子が腎循環調節に働き，神経性調節は出血などの緊急状態下で腎神経が腎血流を減少させ，脳などの重要臓器への血流再分布に重要な役割を果たしていることを明らかにされました。また，先生は昭和 50 年頃から薬物性腎障害に関する研究にも着手し，薬物過敏性間質性腎炎の診断基準を提案されました。

先生は腎臓学の研究に加えて神経内科学に大変興味をお持ちで、神経学の講義を兼任されることも多く、上田内科時代には神経研究グループも指導されました。先生は神経障害とのかかわりの多い末期腎不全患者に着目され、尿毒症患者の精神神経症状の詳細な分析を行い、腎不全の中枢および末梢神経に関する数々の貴重な研究成果を発表されました。特に、当時問題となっていた尿毒症性ニューロパチーの成因については、体液中に蓄積した uremic toxins であることを明らかにされました。

昭和 54 年 4 月から、先生は上田泰教授の後任として第二内科学教室を主催され、宮原内科を開設されました。先生は教室員に時間の厳守、相手の立場になって考えることを強調されました。教室員には国内外への研究施設へ留学することを奨励され、積極的に勉学の機会をつくれ、基礎医学をしっかり身に付けた臨床医の育成に力を注がれました。宮原内科は充実した教室運営によって、臨床面はもとより教育面でも学内外から高い評価を受けました。

先生は、昭和 55 年から厚生省特定疾患腎糸球体障害調査研究班、次いで同進行性腎障害調査研究班の幹事として調査研究に従事され、病態生理学分科会会長や病型と進展因子分科会会長を務められました。この間、昭和 57 年には第 12 回日本腎臓学会東部部会会長、さらに昭和 62 年には第 30 回日本腎臓学会総会会長を務められました。特に 30 回総会では「腎臓学教育ガイドライン」と「腎炎・ネフローゼ患者の生活指導指針」の冊子を 30 回記念出版物として配布し、日本腎臓学会など各方面から高い評価を受け、腎臓学の発展・向上に大きく貢献されました。

このように、先生は大学人として第二次世界大戦後の混乱期から昭和の時代を東京慈恵会医科大学内科学教室の発展に尽力され、多くの臨床医を育成されました。先生の誠実なお人柄は学内外から高く評価され、先生の功績に対し、平成 12 年秋、勲三等瑞宝章が授与されました。先生はわが国の近代腎臓学の黎明期とも言うべき戦後の腎臓学の発展に寄与されたお一人であり、日本腎臓学会の会員として敬意を表したいと思います。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。